



1985年上智大卒業。カルチュア・コンビニエンス・クラブの最高執行責任者（COO）などを経て、2010年6月インディゴブルー社長（15年11月から会長）。2014年6月から東証マザーズ上場のバス最高経営責任者（CEO）。

バス最高経営責任者 柴田 励司氏

議論白熱。私が最高経営責任者（CEO）を務めるバスの取締役会の風景だ。バスの取締役会の議論はM&A（合併・買収）案件や新しい事業モデルの構築など一筋縄ではいかないものばかり。わからないことを決め議論しているのだが、誰も遠慮しない。取締役だけでなく、執行役員、顧問も発言する。議長役の最高執行責任者（COO）や議案の発表者は大変だ。波風立たずに進むことがまずない。胃が痛くなる思いだろ。わからないことを決める。議論なので正解はない。このため、最終的にはCEOである私が最高責任者としてとりまとめることが多いが、毎回脳に汗をかき思いだ。しかし、これは非常に健全な状態だと思っ

波風のきっかけは顧問消えてしまっ。彼らの真

意思決定の質向上に有効

剣さに私や担当者が足を止めて考えることにな

私はこれこそ「コーポレートガバナンス・コード」の本質だと思っ。社外取締役の数の問題ではない。ベンチャー企業は勢いで経営していることが多い。だからこそ、こういう役割の人が必要だと思っ。バスでは旧知の弁護士、税理士の方に社外監査役をお願いした。社外取締役には企業の管理業務に精通した、やはり旧知の大ベテランをお願いした。彼らは私の想いや夢を100%理解した上で、その役割を担ってくれている。ご自身の専門性を軸に意思決定の検証をして、くれい。実にありがたい存在だ。

社外取締役や社外監査役が取締役会の場で発言できるように、COOや常勤監査役からタイムリーに彼らに状況説明をもらっている。どんなに優秀な人であっても、背景を知らずに適切な発言はできないからだ。

社外取締役・監査役を人選するにあたって大事